



Title	國民社會についてNO 2
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1964-07-07
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77449">http://hdl.handle.net/2115/77449</a>
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	I042_01NO2S38.pdf



[Instructions for use](#)

清原 幸三

38

2-2 **NOTE BOOK**  
CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP

國民社會ニ関シ

No. 2

38.11.12.



意匠登録 No.151492 2-2



目次

一 前文 ..... 一

二 人同国係としての口宗被爆者  
係同国係の口宗被爆者

三 コンクリートのけ札に思ふ

四 土地と携持

五 現代口宗の被爆

六 現代口宗生活用具の主要物件

七 口宗作務の仕牙

八 コンクリートと地域性

九 近代口宗の変遷

十 主要な内訳  
コンクリート被爆地域性

二八 二七 二五 二三 二二 二〇 一八 七 六 一

金保証券は大伴自給自足出来し範域下  
その中心分業が白から赤、階梯が構成  
さわつてより大懸線色をなす。今日の朝  
物群は北は石炭や工業品を生産する  
か食料は安い。南は食料は多いが石  
炭や工業品はない。西は<sup>一</sup>の口家屋し  
分業の発展を促す。右は均等に保た  
れるが今では南北別々といふより、若  
しんていよ。二つの口家をなす。いよが  
下あよ。金保証券の上は形成され、口  
家は望まれない口家屋をなす。けれど  
今日の口家は<sup>二</sup>この形をなす。形が保たれ  
ていよ。場合が現れ、いよ。いよが

天にあり得る。

その生活のゆゑに

国家はそれ以外の人が形成するに限り

こゝからいふ、国家は国民の結着を

先づいふはなして老えしゆあるかある

国家はその国民の老若を福とせよとせよ

けすしと結着して老若を伸張せよ。

国家は自分の為りとして老若を伸

張るは他の民族、国民が統治される場合もある

その国民が善く被支配者となる場合もある

国家は支配者が被支配者を支配す

るための道具であつて、福が消滅すると

も用やその出来と統制の爲の果て果て

あつた。この果てには武力を思い通りに

操作し得る押しおろしが附随してゐる



◎階級をその中最高位の貴族に  
立つて理解する。なほ、貴族の位  
階は全体の為の補助的なもの  
構成要素として存在する。然し  
この

又貴族は賤業者の身分になつて  
去る。これはなす出づるも者  
は、職業者を金銭的の  
要素に後進してして認めよ  
所謂金銭主義者の主張は  
云はば、金銭主義は出づるも  
總て貴族階級の位階より貴族の

身にたり、<sup>西</sup>植民地の東洋の身にたり  
と云ふなり。口宗は統治の用器下  
あつてはる然し是故に之は最も  
神聖なる  
法が法にても用する。統治用具が  
口宗である。

統治の術から理解するならば口宗は  
その位階のめとが平和の序とか、人格の  
完成のめとか、道徳的理想實現のめとか  
そんなものは存在しない。◎  
此のめとが口宗は是の位階のめとか平  
和のめとかある。甘い見方である。實際  
的でないからである。

御近く望し、石五の位地の安泰  
を念じつ、考之れ口家哲を  
若日犯し大罪罪、中則中是統流  
の最高の位、考之れ素を  
にあり、地位  
是此等の位、地位  
也殺別か付辱であ。  
とて、その位也、地位  
を順高別  
はすればよい、それを因家して  
無家者になり、とこに不孝の根  
源がある。



人同国係としての国家理解（あり）  
集団同国係としての国家理解へ  
パトリスやパレストやポールの存在と  
は人同国係としての国家理解であつた  
か米口でも今も日本同国係としての  
国家理解に向つてあるであらう。  
マクスウェルも人同国係としての  
国家理解であつた。  
私に支那同国係は人同国係としての  
理解である。その国家理解の社会  
構造は集団同国係としての理解せ  
るべきである。

コソコソの内部に思ふ

コソコソがペンキの植民地からぼたれ政体民  
の独少の持、政口家かすくくと成者  
招つので口連の管理下に下りの聯兵  
か懸念して治学んおちる来たか  
今大はおさるるいおいらしい。

文明はやはりその植民地の間に  
少しづつ成るるいおいらしい。  
外部から云はは強制的に授けられ  
可なりとてはた、みかきおいらぬ、馬を川  
山岸までいっほつて行くにはおいらぬ  
各視に水玉の香す事はおいらぬ  
外から見た合理的下キつと本人のわ  
ク

にたつと想へてまその口の幸化の成る  
夜の如任ルよつて受け下りて行く愚程  
ほろの口の人にもかきより任るかた  
のては皆このか。

今世是れは他の口のすに平流し  
合とすか多すオ。最も善業によ  
つてその口の人の幸福を思ふにか  
てあつても助けられは助けさるゝ  
我も七瀬の岸もあ。あ口のたか  
まひはなく自口の便強のたにその口  
の改む平流したる指導しれりす  
ま常之の帝口を都の浸染の我とし  
い形かあよとあつる。

長い事の内には内外に於て敵に在るべき  
武力の組織はあつた。人同<sup>的</sup>人<sup>的</sup>道徳に  
成り上つた者たるは分りぬとも、我が  
敵は他<sup>の</sup>敵に非ざる。吾輩  
に善悪の団体となり、他<sup>の</sup>を善  
悪の標に置かず、用<sup>する</sup>の<sup>は</sup>其<sup>の</sup>善<sup>悪</sup>に  
依<sup>る</sup>なり。其<sup>の</sup>善<sup>悪</sup>は其<sup>の</sup>口  
の内外の敵に在る否の口  
の善悪を以てするに非<sup>ず</sup>一<sup>概</sup>に非<sup>ず</sup>  
ないのか。

もし他<sup>の</sup>を軍<sup>する</sup>基礎<sup>の</sup>あるは要<sup>の</sup>あり  
新<sup>の</sup>用<sup>する</sup>なる場合、自<sup>己</sup>内<sup>の</sup>口<sup>に</sup>民  
と<sup>同</sup>族<sup>の</sup>生活<sup>指</sup>、生活<sup>指</sup>水準<sup>を</sup>其<sup>の</sup>

あうり  
の持け

の稼働力も多きもので、収録しますすすすす  
下す。

口説の古くから考へては、力の団体下他

口説は利用すし、かたぬるか、少くても不割

り、然し何れも協力を止める。然し協

力を止むても止めなくとも何時でも戦者

口説に互いに備えていよ。底持けの善

人に存するは口説の名に於ては出さる

いよとにじらぬる事な。口説のこの様

質は今も名の事には違ふことよ。

口説物も口説同の關係は日に日に

多くなりつゝある。その道徳の用

果が然らざらば察してあるがらうである。



口家は其の自身力為のもの下は徳も  
道徳もきりくは平多不捨つ

ものつあす子を好後

歎破した船員が道とたよといは一

枝の板を借て浮遊しこい時其の敷部

につかあつたはる物を押のりもてお果に

おぼれんとする仲子の船員が

はたしぬり同い次第がある人生活は

絶対の尊いものとし而指し指針にあ

すを思ひてい。其の同上法律は口家

はその存在を危期に在れば如何なる徳

義と認め、わいと其のいふおす。認め

か認めあふか。口家行都の可否を決定

す。のは若おには威力である。勝つば家

11





それから

のわ口に文化の高さの脚が重なり、我々も

文化や合魂既を度け入れ行くところを水

の葉易好愛の脚。あいつをよくと見取

の二核即す可き下あゆま

こゝで我々がなぶるは山口宗はそ

の土地の徳民が自らの名に形成する

と陥つたものではない、他の中統治の

中心は、<sup>他族との</sup>とんちとこり、<sup>他族との</sup>なかり物さ

命程に見いすの難良やマイノリティ

が、この身はなつて口は此を致路

可さなく、口は此を致路、<sup>力も者</sup>制するも支配組

機下あよ、<sup>絶対的</sup>如何なる主権上に属するものか、<sup>力も者</sup>や

は一層したのか、支配者の層が山階層

13 権部も支配も法制するものか

世の1/10の生活の質に育つてきたと  
してつよより大はたかである。

支配者は自由を愛し、被支配者に立

えをす。のが、<sup>政治的</sup>目であるが、<sup>政治的</sup>方のみは

自身に押しつけよう人に余力を<sup>つと</sup>を添と

二、<sup>政治的</sup>自由より遠ざかるに統

この余も少なくな、<sup>政治的</sup>行くのである。

憲法が、この<sup>政治的</sup>端に育つと支配者より

利害<sup>政治的</sup>なす、場合が多くなる。その下の

政治は、<sup>政治的</sup>底にあり、探取である。

それ、<sup>政治的</sup>の<sup>政治的</sup>武力が、<sup>政治的</sup>からある

の。若くは、<sup>政治的</sup>人、<sup>政治的</sup>働かして、<sup>政治的</sup>地

の<sup>政治的</sup>地として、<sup>政治的</sup>大業である。人が

14

外に逃げ去るに際しての所慮は口外上  
りの優入に對する所慮と同様に大  
きな同んで口煙が愈し荒い程  
也である。

而ち口宗の宗務から

何時の時代にもマイノリティをいクルべきであら

ず、あまの身の身ルなるに於ては政治

は如何なるへて見出さるべきか、大の下の政治の正体

はよく分るなから、大の下の政治。然し、我ニ治世

の多大責任に於ては、口宗が、村民の依歸の

精進致す事、口宗の決意である。

其れ、之こそ基礎として、物用せしむる先

の核中競争が起るべきに於ては、口宗は

大日の村民の心を、平穩に導くべき

今

なり、この字の「老」の口民の立場が、  
口民や政治を改め、疎外して見ねば  
ならぬ立場が起つてゐる。

口民をニゲさして一歩はA口民一歩は  
B口に支配される異化の手筈もあこ  
り、民族間解放の途への弱少民  
を包摂して来た大口が弱や民族の  
人権を陰に（軍部）なやめさせる業たのも当然  
である。こゝでも口民統治の根本的矛盾  
が顕れりさかに見えてゐる。

漁業や漁民の俄かな衰退と共に外海  
漁業が盛んとなり、その為には増し漁業

概が登場したのも戦後の新体制のつ  
くりの同歩

19

下。海上下の口控線は労働の労働契形  
一一、二冊

と同一の性質である。  
法的にはなく  
法的である。

① 分 地 権 土 地 権 土 地 権 土 地 権 土 地 権  
の 権 利 は 土 地 権 土 地 権 土 地 権 土 地 権 土 地 権

土地と権利

アイ子に職業の自由、小作民の自由を以て  
大和民族と公認の権限を認められたる  
事、（土地と権利） 土地と権利の  
復民が、今、土地の所有者は  
余り多くなり、心づく、大和民族  
の中に、ま、下しか、な、生活、  
一、（土地と権利） 日本、  
と、同一の形式の生活を、  
権利、  
複、  
を、  
この、  
弱、

のうけの没落の運命といふこれは零丁  
最悪であつて最良の道に走つたのと  
思ひぬ。ロイノリチキク<sup>の</sup>ル<sup>の</sup>中<sup>の</sup>の  
道をとるのけ多クいへおろす。の衆は  
その支那者や露の脅威のためであつ  
たといふ人々の為にはない。  
今の様は□家が地獄にははつきり  
ほりを足履にしゝ素のほ、一つの境  
を出て逃げ逃ぶ空想地ほといふ  
ぢや。

現代日本の発展

一、愛国中の口定

(内部の力)

更なる発展は口外に

主眼

二、口定の増大性の弱体化

経済の強制に伴う増進協力

(外部の力)

三、多量な強固の支那が持たせられた (外部の力)

口定の示私に絶望してはならない (内部の力)

(内部の力)

口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

口定の増進を助ける

口定の増進を助ける

(内部の力)

口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

(内部の力)

3. 口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

(内部の力)

4. 口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

(内部の力)

5. 口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

(内部の力)

6. 口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

(内部の力)

20. 口定の増進を助ける (口定の増進の要諦)

(内部の力)



7 8

一世は二大に分かつ、  
あるは

二大に分れるが、  
戦争

は、  
政治的

人作の  
欲

此の  
二大

此の  
二大

一、一五、

21

現代国家統治用具の主要物件

一、武器

二、マスコミ機関

三、官俸制

四、政黨

五、議院

六、暴力団

口家体験の仕方

口家体験の奇習のよきと悪んか。清らかなの  
人の習性下か治めらぬ人の習性によさか

その何れか。

初は生れを以て口家の存在を以てするさか

ねた子治なつ。あまからるかに彼おのり。そん

た子體は父のついでに親父のついでに母

先づついでに母なりである。何者<sup>年</sup>も何れ年

の<sup>年</sup>も體は同じである。口家は其へ

うれついでに母を以て最初から考へてよい

のである。それが必要大時かとん<sup>年</sup>も體で

あつた方とせよ水は介介は身<sup>年</sup>も體を

了<sup>年</sup>も體である。口家はよへるよへるもの下ま

る。着<sup>年</sup>も體と同じなり。そり考へてよ

のであ。

然し私のの面前に最近しきりに作り出

されていよ。日本は甚く同界である。

クローソルがあれ、昔々大望り政府。

要職にあり、人が決り、水、環、厚が、其、

厚、厚が、組織、わ、五の下に、民衆、を、統

え、と、知、を、任、を、へ、す。

あ、か、

二、和、治、政、権、の、器、を、予、備、で、い、日本、は、今

秋、の、ある、政、権、を、世、界、の、形、極、々、と、固、執

して、考、え、た、場、合、の、表、現、下、あ、い、

20. 共同体は生活共同体が主で、必要に応じて

いしめ何なる集団もその上に形成し得るもの、

且その集団の緩むが累積したわけではきんぐらう

かつきんぐらうである。一つの新共同体による共同も

昔同体といふのは、スクールのコミュニティーの如し。

生活共同体は特別な界へは要がある。

コミュニティーと地域性

21. コミュニティーが健康増進と受持命を作り、

その上に隣家族和睦命を作り、

経済増進命、青年同好命を累積

したものをコミュニティーとよぶかある。ここには

地域性は少しも思ひ入れない。\*

昔のコミュニティーは当然に地域性を含んでゐた。

主として地縁と血縁によつて交つてゐたから、村や

と都市におけは血縁の同体、地縁の同体

職業の同体、趣味の同体と交つた。性質

多岐のそれ等の集団を作つた。

此比では地縁職業の趣味の外主義主体の共鳴

思想學問政見の教養の一致の為、娯樂

散光旅行の、等々同体を作り、利便の

22.

この団体

人はお互いに何と合は互いの迷惑をかけたせいで  
かたがれもせぬ団体で、さうしてた多村が下  
人は半歩で自由で、互いの弊害し合は、それ  
華歌合の協力のよい人道を以て自由を以  
てあつてを思ふ念の念の、知的善人のさうど  
した交わりを乞ふに、それか近代インテリ  
の社会観人倫観として、そんな人は見な  
知事の人下もさうかと交り平敏な協力の合と  
障か出来よ。

近代国家の発展

(一) 人同国任、人同累修、人同累修、人同累修

同修、累国、累修、累修

目的意識の明白化、累国化、累修

(三) 他国勢力の介入、支配の増大

(四) 累国対立の激増

西條啓内訳

コミニニテ、理念と地域性

又、コミニニテ、の重積係、五の生、のほや、は、

らくで、海を、の、和、無、作、あ、業、を、我、等

意、機、の、基、礎、に、な、も、し、の、加、入、の、地、域、性、の、

い、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、

の、統、一、の、力、が、あ、い、。

地、域、性、が、あ、い、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、

何、れ、が、あ、い、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、

学、務、係、係、同、等、し、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、

外、ル、人、同、同、性、の、累、積、が、あ、い、ま、ま、の、ま、ま、の、

特、有、の、意、思、の、世、界、が、あ、い、ま、ま、の、ま、ま、の、

期、待、の、世、界、が、あ、い、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、

あ、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、

少、し、つ、部、分、他、社、務、係、係、し、て、ま、ま、の、



我邦よく用いられる言語は、<sup>二カ所</sup>地方の地域語と云ふ  
 語がある。朝鮮の共同語と云ふ語は、<sup>又韓語</sup>  
 さへこの右の共同語と云ふ語の日本語  
 である。共同語と云ふ語は、新造語  
 と云ふ語の対立するもの下、トイハ、<sup>度</sup>  
 コレシヤフトトイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 漢字と云ふ用いられている。又同様な意  
 味下、コトニシテ、トイハ、アツレエ、<sup>度</sup>  
 対立し、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 然し、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 か、おれ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 織の形態、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>

29  
 化して行く。時、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 故に、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 新か、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 的、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 かの、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 土地、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 いと、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 し、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 色、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 エ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 地域、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>  
 ル、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>トイハ、<sup>度</sup>







△都市の城壁が不用になったのは口家の際、  
御懸が実備して来たからである。村越の  
土壁が不用になったのは、都市の城壁が  
完備した時である。それ以上は分らない。  
今日良は多く口の口境の守備に  
期待してゐる。

五巻之の短編が口家である。  
故に口家の口境の居住者の總数は  
よく形成されてゐる。何より口家の  
居住者全体のものは、その一割の人々  
のしるべきにないと思ふべきに思ふ。  
いる。口境は口家の口家の生年  
を学ぶかかして、金の氏が一の屋敷に  
共同体としての宿舎をもちたものといふ  
の我守意識もそれには違ふもの。  
口家の運命は多に同族をもち口境總  
上の出来事か口家の身に大々くいふた  
のは名だである。△

33 口境のことは法縁上の縁を以て政治上の

境が、<sup>と</sup>と<sup>り</sup>に<sup>な</sup>る。口際法上の公認さ小  
土境界と政治的に移物<sup>三本</sup>を<sup>し</sup>て<sup>の</sup>実生法  
上の口境下<sup>三本</sup>非<sup>本</sup>は<sup>法</sup>の<sup>意</sup>境<sup>を</sup>法<sup>に</sup>す  
く<sup>公</sup>法<sup>の</sup>契<sup>結</sup>と<sup>相</sup>互<sup>の</sup>契<sup>力</sup>が<sup>互</sup>に<sup>合</sup>す  
契<sup>結</sup>内<sup>の</sup>契<sup>力</sup>は<sup>比</sup>し<sup>可</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>の</sup>契<sup>力</sup>は<sup>公</sup>法<sup>の</sup>  
契<sup>結</sup>の<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
力<sup>の</sup>契<sup>結</sup>今<sup>の</sup>契<sup>結</sup>は<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
日本<sup>人</sup>は<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
は<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
に<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>

口境<sup>の</sup>契<sup>力</sup>は<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
と<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
や<sup>契</sup>力<sup>に</sup>比<sup>し</sup>可<sup>な</sup>ら<sup>ず</sup>の<sup>契</sup>力<sup>は</sup>  
39

口境内にある。自分の口の口境を振りかざせば  
ありとあらゆる口境はもうとこもなくなると

先日の親向で、大甲口実業社家の同窓会

一人が申口から出て、リン聯の大使館に

出所して、中口日本ソ聯台湾政府の

口境同型となり、また米津夜の手付不

あ。

昔別の申口人の尻尾

日本の股脛は

口界は、鏡の扉の内にある。

口境の言葉

高麗村の山森中、

茂地は人回の想

生活の意識化

意識的集團の政治力化

政治的好意と口説の分離

勝てば官位は外は賦軍

世界各地にわたる交流のネットワーク

華金、口説成立

口説を土壌共同と集團化

と見做し、口説を是の目的

口説の目的の組織化と見、口説

の修正の必要

口説を共同作の上に冠らす事

口説と同様、オスロトスの上に口説が

かおさつアメリとオスロトスの修正の

必要

家の戸籍

村の土地

都市の城壁

口説線

口説の存在

高層住宅の取引、村、市中大層

集落、共同の交流、社会

都市の地位、発展

口説成社会の最近時の激変

社会関係の解放化

社会関係、大量時代、社会の激変